

改訂版防災マニュアルの作成及び広報の仕方について

金沢大学工学部

○ 岩田 涼乃

金沢大学大学院

越田 大地

金沢大学工学部

フェロー 北浦 勝

1. はじめに

日本は世界でも有数の地震大国であるため、昔から地震の被害を被ってきた。近年でも 1993 年の北海道南西沖地震、1994 年の北海道東方沖地震、三陸はるか沖地震等大規模な地震が断続的に発生しているため、一層の地震対策強化を図ることが望ましい。特に 1995 年 1 月 17 日に起きた兵庫県南部地震では、大規模の物的被害、人的被害等甚大な災害をもたらした。加えて今までの防災のあり方や行政の対応、危機管理体制の杜撰さや甘さが浮き彫りになる地震でもあった。以後、今までの地震に対する甘さを踏まえて企業や学校の防災体制が見直されてきたが、今日ではその意識も次第に薄れてきているのが現状である。

そこで本研究では、金沢大学全体の地震防災に対する意識を高めるために学生を主体とした防災体制の確立を目指すべく、大規模地震を想定した金沢大学角間キャンパスの改訂版防災マニュアルの作成及びその広報の方法大学における危機管理と防災のあり方について考える。

2. 金沢大学における防災意識

近隣住民は緊急時の学校というと、大半は避難所や避難場所をイメージするであろう。しかしながら、大学側としては教職員や学生の危機管理・防災意識は勿論、元から地震に対しての関心度が薄い¹⁾。

2000 年 12 月に政府の地震調査委員会の報告では、金沢市内の森本・富樫断層が 30 年間に最大 5 % の確率で震度 7 クラスの地震を起こすと想定されている。兵庫県南部地震では 30 年間に 0.4~8%²⁾ という確率だったことを考慮すると、金沢地震の確率は決して低い値ではない。しかし金沢は、過去地震による被害を殆ど受けていないため、大地震をあまり現実のものとして受け入れていない感がある。

3. 防災マニュアル

現在の防災マニュアルには、分厚い冊子で理解が難しいものや抽象的でイメージの全く湧かないものも多々あり、存在自体が知られていない例も少なくない。実際に金沢大学の防災マニュアルも、重々しく、簡略化され、行動のイメージが湧きにくいものになっており、学生へは殆ど普及していないと言ってよい状態である。このように防災マニュアルが普及していないところでは、往々にして防災意識も低くなっている。すなわち、防災マニュアルを普及させることは学生たちの防災意識の向上へと繋がると考えられる。

また金沢大学角間キャンパスは急峻な崖や谷部を切・盛土して建造されている。建造物の大半は切り土に建設されているが、建造物のごく一部に盛土と切土にまたがって建造されているものがある。盛土と切土にまたがって建造されており、このような位置に建造物があると、切土部と盛土部の振動性状の相違が構造物両端部の振動に差異を生じさせ、構造物の振動はねじれの性状を持ち、構造物には水平方向にひずみの生じる可能性がある³⁾。このような状況から考えても、金沢大学における防災マニュアルの普及は必要不可欠となる。

3. 1 対象

今回の防災マニュアルでは、対象地区を角間キャンパスとし、対象人物を学生に絞った。その理由として、現在、金沢大学は第二期角間キャンパスを大規模に建設しており、ほぼ全ての学部が将来角間へ移ることを考慮したことからである。また、私たちが学生ということから学生心理を一番掴みやすい、学生が人数の割的に一番多い、防災において知識が一番不足しているのは学生である、という点からである。

3. 2 内容項目

改訂版防災マニュアルの目次項目を以下に示す。

- ・ 金沢における想定地震
- ・ 日頃からの心構え
- ・ 地震が発生したら
- ・ 災害対策本部
- ・ 避難場所・避難所
- ・ 緊急連絡網
- ・ 掲示板

4. 広報の仕方

本研究で作成した改訂版防災マニュアルを、幅広く学生に閲覧してもらうためにインターネット上に掲載する方法を採ることにした。アドレスは研究発表時に説明する。

インターネット版防災マニュアルを作成する利点として、自分の知りたい情報だけを見ることができ、検索機能が充実し、視覚的にも美しく仕上げられるという点が挙げられる。欠点としてはパソコンを持っていない人からは自宅から閲覧できない点が挙げられるが、学校に置かれているパソコンを学生は自由に使えることを考慮して、学校から閲覧してもらうことにする。

また、インターネット上に掲載する際に、閲覧する人たちがより利用し易いようにアンケートにて評価してもらうことにした。アンケート結果により、マニュアル内容を再検討・修正を図ることにする。

- ・ 満足度チェックリスト+感想自由記入
- ・ 選択式のチェックリスト
- ・ マニュアル閲覧者たちによる討議

まず自分たちでマニュアル自己評価をした後、ユーザー評価・ユーザーチェックを入れて、再度自己評価を行なう、という過程を繰り返すことにする。

5. まとめ

今回の研究で、学生のための防災マニュアル作成を目指し、既存のマニュアルから学生を主体とした項目以外は省いたこと、学生の視点から見た項目に重点を置いたことから、対象となっている学生に理解し易いものとなったと思われる。

今後の課題として、防災マニュアルをインターネット上に掲載しただけで全学生に防災マニュアルが普及するとは言い難い。マニュアルが本当に学生へ浸透するまでの経緯を調査しつつ、広報の仕方について他の方法がないかさらに検討し、学生に防災意識を浸透・定着させる方法を考えていかねばならない。

また、事後に被災者の最も欲しい情報を最優先して届けるリアルタイム事後マニュアルや、季節・天候・発生時刻等で被害予測シミュレーションができる等、さらにマニュアルに改善を加えていく予定である。

参考文献

- 1) 後藤幸司：大学における地震防災マニュアル作成に関する研究，金沢大学修士学位論文,pp. 35-91,2001.
- 2) 地震調査委員会：今までに公表された活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧，
<http://www.jishin.go.jp/main/choukihyoka/ichiran.htm>
- 3) 多賀直恒，富樫豊，今岡克也：丘陵地における埋土地盤及びその上に建つ構造物の振動性状、日本建築学会構造系論文報告集 400 号,pp.149-158,1989.
- 4) ラプラス取説研究所：ラプラス取説研究所のホームページ，
<http://www.laplace-lab.org/index.shtml>